

実践報告

学年	教材	検討内容
6年 名張 H 教諭	「帰り道」	14 段落の「何かを洗い流した」について、その後の「みぞおちの異物が消えてきた」の文と関連させて、“洗い流されたのは異物なのか、異物ではないのか”を問題として子どもたちと考えた。「消えてきた」の表現に着目して問題解決に至ったが、「消えた」と「消えてきた」の違いを子どもたちから出したり、教師から例文を提示したりして、全員参加できる場面を作ることでもできたのではないかと考えた。追求方式の授業の中で、仲間と学ぶことの意義や、自分の意見をもつことや友だちの意見に反応したりすることを大切にすることなど、6年になってはじめての物語文なので言葉を手掛かりにして読んでいくことも改めて伝えた。
6年 鈴鹿 T 教諭 A 教諭		なぜ、15段落「今だ、と思った。今、言わなきゃ、きっと二度と言えない」と思えたのか。(映像報告は次回)について解釈。 直前の文「アスファルトの水たまりに西日の反射がきらきら光る」が原因か。その前に「ずっと目をふせた」時点では「言わなきゃ」という思いはないのではないかという意見があった。「言わなきゃ」の中身は何かを追求する必要がある。律の心の中に「ほんとに両方、好きなんだ」をいつ言おうかと考え続けていて、そのチャンスが直前の文がきっかけとなって到来したと捉えるのがよいか。 この問題を解決することが、この物語の何と繋がるのか、何が見えてくるのかを追求するところまではいっていない。
6年 鈴鹿 A 教諭		10 段落「ぼくは周也に三步以上も遅れをとっていた。もうだめだ。追いつけない。」で、追いつけない距離ではないのに律がそう思ったのはなぜか。物理的な距離ではないことを子どもたちと授業した。
1年 名張 I 教諭	「あさのおひさま」	詩を2連に分け、1連と2連との関係、1連の中の「あさのおひさま おおきな」「のっこり うみから おきだした」との関係をもっていく必要がある。「おおきい①」の「な」が“感動”を表していることや、「あった②」の「よ」は、誰かに伝えている表現であることに着目し、「な」や「よ」を使った身近な例文を出して、「おおきいな」や「あったよ」をどんな気持ちで読むといいかを考えさせるといい。また、「あさのおひさま」という表現から、「ひるのおひさま」との違いに着目し、そこから“お日様がのっこり海から起きだした”という場面をよりイメージさせるといい。 低学年は、言葉からイメージをふくらませて、お話をつくるといい。
2年 鈴鹿 K 教諭	「ふきのとう」	5場面の「空の上で、お日さまがわらいました」の「わらいました」に対して、“変だ、おかしい”という疑問を持ち、笑った原因について、その後の「おや、はるかぜがねぼうしているな」の文に着目した。「おや」や「な」の表現に着目し、「おや」や「な」を使った身近な例文を出して、ここではどのような意味が適切か、子どもたちと考えるといい。

☆1人ひとりに対してほめる…1時間の授業だけでなく、1日中、そして1年間ほめ続けられるようにする

☆1人ひとりを本気で変える…4月以降からが勝負！授業に楽しさやおもしろさを出す